

2012年5月30日(水) 19:00 開演

会場:渋谷区文化総合センター大和田 さくらホール(東京)

全席自由: 会員・学生券 2,200円 (一般2,500円)

会員・ペア券 4,000円 (一般4,500円)

ピアニスト

## 大崎結真さんってどんな人？



幼少の頃から、私は何にでもすぐ“ハマる子”だったらしい。3歳の誕生日を迎える頃、クラシックバレエ教室に通い始めすぐ熱中するようになる。その教室でレッスンに使用していたショパンの音楽がたまらなく好きになり、ピアノを習い始めてまた“ハマった”。作曲家の繊細でしなやかな精神は、万物に刺激され化学反応を起こし、また彼らが残した作品を再現する者にとって、ひとつの作品との出会いが無限の好奇を誘う。作品から受けた刺激は熱中を連鎖させ、映画や絵画鑑賞、読書、落語へと、趣味の世界へも波及させる。落語好きと言うと「何たるアダルトな趣味!？」と大抵は驚かれるが、面白いのだからしょうがない。特に古典落語は、下げまで知られている話をどう聞かせるかが噺家の腕の見せ所、クラシック音楽にも通じるところがあると勝手に思っている。『風呂敷』『厩火事』『火焰太鼓』など、ワイン片手にパリのアパートで楽しむのは乙なもの。ついでに異国での寂しい独り暮らしも癒してくれる。



「パリ16区、アパートの部屋」  
ここから、パリ国立高等音楽院に通学した。

大崎結真さんは、

トッパンホールでの演奏が評価され  
第37回日本ショパン協会賞を受賞!  
その演奏会のライブCDです。  
是非お聞きください!!

## パリ16区でのスタート!!

私はイタリア・イモラを経て2001年、芸術の都パリ・16区での生活をスタートさせた。

その後、ピアノの音に対する苦情、諸事情により引っ越しを繰り返すことになる。

《ピアノが弾けて家賃が安い》という絶対条件をクリアした物件となると、華やかな市街から

段々遠ざかり、最終的にパリから20キロほど離れた

西郊外のサン・ジェルマン・アンレーに辿り着いた。

この町はドビュッシー生誕の地としても知られている。

ドビュッシーは5歳の時一家でパリへ移住、波乱万丈の

人生と共にパリ市内を転々とし、9回目の引っ越しで

16区に到着した。偶然にもドビュッシーと同じ町に

住み、同じパリ国立高等音楽院で学べたことを私は

嬉しく思っている。



「イタリア・イモラ音楽院がある、スフォルツェスカ城」  
ここでフランコ・スカラ教授にご指導いただく。



♪ファーストアルバム  
ショパンリサイタルライブ  
2,800(税込)

曲目:

ショパン  
アンダンテスピナートと  
華麗なる大ポロネーズ 作品22  
3つのマズルカ 作品59  
バラード 第1番 作品23  
24のプレリュード 作品28  
アンコール  
ワルツ第4番 作品34-3  
エチュード 作品10-4  
ピアノ:大崎結真  
録音:2010年11月6日トッパンホール



「16区のアパート」  
ここでパリ留学生活が始まる。



「サン・ジェルマン・アン・レーの私が住んでいた家」  
この中のワイン貯蔵庫をアパートに改造した部屋で、  
帰国するまで過ごした。

## ドビュッシーについて

サン・ジェルマン・アン・レーにあるドビュッシーの生家は、現在「ドビュッシー博物館」として公開されており、彼の生活の一端がうかがえる遺品や文献などが展示されている。1889年、ドビュッシーがインタビューに答えている資料も残されている。「好きな詩人は？—ボードレール。好きな作家は？—フローベール、エドガー・ポー。好きな画家は？—ボッティチェッリ、モロー・・・」など、何れも19世紀末に熱狂的に支持されていた面々。ドビュッシーも流行りの退廃的な美の世界に心惹かれていたわけである。



「ドビュッシーの生誕の地でもあるサン・ジェルマン・アン・レー。駅前に聳えたつお城」

今回演奏させて頂く『前奏曲集』第1巻（1909～10年作曲）には、燦々と太陽が輝く『アナカプリの丘』（5曲目）のような「陽」の曲を縫うように、世紀末的「陰」を纏った曲が配置されている。4曲目にはボードレールの詩『夕べの調べ』から着想を得て、詩の一節をそのまま標題にした『音とかおりは夕暮れの大気に漂う』。



「16区、アパートの近くにあるバラ屋」  
ドビュッシーもこの辺りを散歩したのだろうか。

アナカプリの光との間にきりりと対照をなす6曲目『雪の上の足跡』では、ドビュッシーが何度かとり上げているモチーフである「雪」に対する観念が左手の特徴的なリズムに込められている。1905年、交響詩『海』を完成させたドビュッシーは「どこか特定の海をかいたのではなく、記憶のなかに集積された海のイメージである」と言っている。この『海』に対してピエール・ラロが、「自然の複製を前にしているという印象」と批評しドビュッシーを憤慨させたというから、悪意たっぷりな名付けられた絵画界における「印象主義」を、そのまま安易に結びつけて自分が語られることがあれば、あの世で地団太を踏むに違いない。ドビュッシーと海の奥深い呼応から再創造された『海』は、よく言われる絵画の「印象派（＝今日にしているものの一瞬を写し取る意）」としてのそれとは景色が違って見えてくる。

## シューマンについて

ドビュッシーより半世紀前のドイツで、やはり時代的・文化的背景、特に文学と深く共鳴したシューマンは熱中の人だった。

青柳いづみこ著『音楽と文学の対位法』によれば、「文学熱にとり憑かれ、文献学、紋章学、詩歌、悲劇…と次々に熱中した」とある。そして作家ジャン・パウルの崇拜した。シューマン自身、あまり評価していなかったという『謝肉祭』（op.9）は「ただ私には、いろいろと異なった精神状態に興味があるのだ」と、4つの音符



「パリ国立高等音楽院、ジャック・ルヴィエ教授のレッスン室」  
2年間にわたり、ここでルヴィエ先生にご指導頂いた。

〈ASCH=イ、変ホ、ハ、ロ〉から作られた3通りの音列によるモチーフをもとに、コメディア・デラルテ（イタリア生まれの即興喜劇）のキャラクターや実在の人物が登場する諸情景を遊戯的に書いている。めくるめく出会いの中で、文筆家としてのシューマンがペンネームとして用いた“フロレスタン（第6曲）”と“オイゼビウス（第5曲）”も現れる。

激情的で外向的なフロレスタンと、夢想的で内省的なオイゼビウスの相反する二つの人格は、どちらもシューマンの中に存在し、彼が耽読していたジャン・パウルの『わんぱく時代』に登場する双子の兄弟ヴルトとヴァルトに重なる。

シューマンの音楽の中で、幾度となく出会うフロレスタンとオイゼビウス。二人のせめぎ合いは、しかしその産物として若き日の名曲たちを生み出したが、やがてシューマン自身を圧迫してゆく。

そしてライン河に身を投げた翌々年の1856年、精神病院で死を迎えるという運命を辿る。

## 最後に

興味も思考も尽きることなくまだまだ知らないことだらけ故、作品との関わりは今後も長きにわたって続くことになる。

名手ホルヘ・ボレットは言う。「作曲者は一つの作品の創作にどれくらいの時間をかけるだろうか。個人差があるだろうが数週間からせいぜい何カ月でしょう。

だから私はショパンのバラードをショパンよりもよく知っていると思う」

(青澤唯夫著『名ピアニストの世界』)と。

ボレットの境地に至るとき、そこからしか生まれえない音楽があると私は信じている。

大崎 結真

大崎さんのもっと詳しい情報は公式サイトよりどうぞ

大崎結真オフィシャルホームページ [www.yumaosaki.com/](http://www.yumaosaki.com/)



「19区にあるパリ国立高等音楽院」



「16区のアパートの近く、セーヌ川」  
セーヌ川にかかる橋を渡ると15区になる。

## PROFILE

大崎結真 (ピアノ) おおさき●ゆま

2000年、東京藝術大学附属高校卒業後、渡欧。(財)ローム・ミュージックファンデーションより奨学金を得てイタリア・イモラ音楽院入学。在学中、マウリツィオ・ポリーニ氏より奨学金を受賞。翌2001年、パリ国立高等音楽院大学院(第3課程)に合格。(財)安田生命クオリティー・オブ・ライフ文化財団より奨学金を得て、2003年、同音楽院大学院修了。2007年、文化庁新進芸術家海外研修員としてパリ・エコール・ノルマル音楽院コンサーティスト課程入学。2009年、同音楽院コンサーティスト・ディプロムを得て修了。国内コンクールにて優勝・入賞の他、16歳で参加した「浜松国際ピアノ・コンクール」(97年)、「ロン＝ティボー国際音楽コンクール」(98年・入賞と共にフランス音楽特別賞)、「アルトゥール・ルービンシュタイン国際ピアノ・コンクール」(01年)では何れも最年少入賞を果たす。「ピラール・バヨナ国際ピアノ・コンクール」(01年・第2位)、「ジュネーブ国際音楽コンクール」(02年・第3位とフランク・マルタン特別賞)、「リーズ国際ピアノ・コンクール」(03年・第3位)では同コンクール16年ぶりの日本人上位入賞を果たし、「ショパン国際ピアノ・コンクール」(05年・ファイナリスト賞)、「モロッコ国際ピアノ・コンクール」(06年・第2位)、「パリ・オートモービルクラブ国際ピアノ・コンクール」(07年・優勝)等々、多数の入賞歴を持つ。

6歳でN響団友オーケストラと協演。以降、東京交響楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢、仙台フィルハーモニー交響楽団、読売日本交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、ポーランド国立放送交響楽団、モロッコ管弦楽団との協演の他、国内外のコンサートや音楽祭にも多々招かれ出演している。

幼少期より注目を集めていた抜群のテクニックとスケールの大きな音楽性。近年はさらに美音と幅広い表現力に、「楽器の隅々まで響かせている本物のテクニック」「表情豊かなモチーフ」と高く評価されている。また08年、「カルタゴ音楽祭」(チュニジア)でのリサイタルでは、「彼女の指は魂を震わせ心を動かす。楽曲の中で彼女は旅をし、その真髄をエレガントで繊細な演奏の中に引き出した」(Le Temps 誌)、「ピアノが最高のレベルにまで高められた瞬間」(Corriere di Tunisi 誌)、「熱情、内在性、個性、ノスタルジー、熱意、奥深い叙情性。

大崎結真はこれら全てを用い、心惹きつける音楽の価値や豊かさを伝えている」(La Presse 誌)など海外メディアから絶賛された。

2010年より拠点をパリから日本へ移し、2010年度/第37回『日本ショパン協会賞』を受賞。受賞の対象となったトッパンホールでのリサイタルは、ファーストアルバム『ショパンリサイタルライヴ』としてリリース。2011年10月、セカンドアルバム『深碧(あお)のラヴェル』もリリースされ、共に好評を博している。また2012年は、ドビュッシー作品によるアルバムをリリース予定。今後の活躍に注目と期待が集まる若手の大器である。これまでに藤原亜津子、大畑知子、金子勝子、播本枝未子、中村紘子、フランコ・スカラ、ジャック・ルヴィエ、マリアン・リビツキーの各氏に師事。

♪セカンドアルバム  
深碧のラヴェル  
2,800(税込)



曲目:  
ラヴェル  
夜のガスパール  
水の戯れ  
ソナチネ  
ラ・ヴァルス  
亡き女王のためのパヴァーヌ  
ピアノ:大崎結真  
録音:2011年6月7~9日  
三重県総合文化会館大ホール